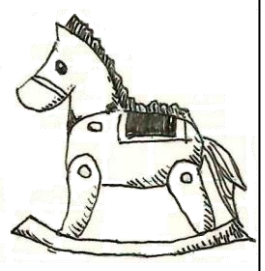
木馬



発行
2023年9月29日
No.110
都立成瀬高校
図書委員会

作家訪問・インタビュー・・・・・1
古本市・会計報告・・・・・・・9
アンケート集計結果・・・・・・10
校内ビブリオアバトル・・・・・11
図書委員会からのお知らせ・・12
四コマ漫画「今日の本田くん」・12

みなさんこんにちは！
図書委員会では、今年も「作家訪問」を行いました。私は、3年間の図書委員会の活動を通して、「作家訪問」はもちろん、読書会や文化祭の古本市などでとても身になる経験ができ、学ぶことが多くありました。来年度からの活動でも、図書委員のみなさんにとって良い経験ができるといいと思います。
図書委員以外の人も、この「木馬」で情報共有しましょう。
（前期図書委員長　3年　MM）

作家訪問

第10回目となる今年は**哲学者**である**岸見一郎先生**に取材を行ったので、これまでとはまた違った取材内容で、刺激になりました。取材にご協力頂いた岸見先生、出版社の方、先生方、ありがとうございました。
（MM）

インタビューの記録

始めの挨拶（ST）
お忙しい中、図書委員会のインタビューをお受けいただきありがとうございます。
自分は小学生の時に姉に薦められて、『嫌われる勇気』を読みました。
自分は今、図書委員会に所属しているのですが、今もどちらかと言えば本を読むことが苦手で、あまり本を手に取りません。しかし、そんな自分でも、引き込まれるように、この本を読んだことを今でも覚えています。対話の形で書かれているので、(登場人物の)「青年」になったつもりで読んでいました。どうしてもこういった本は堅苦しいイメージが強いのですが、この本は自分のわだかまりを解いてくれました。そのため、僕にとって思い出の一冊です。
これからインタビューを始めさせていただきます。よろしくお願いします。

TU　先生のプロフィールを読ませていただきました。高校生で哲学を志されたということですが、そのきっかけは何ですか？

岸見先生　高校の倫理社会という科目で、古今東西の思想を学ぶことができました。その時の先生が、哲学の先生だったことがきっかけです。相手が高校生であるにもかかわらず、話の内容は高校生向けではなく、本格的に学問を学ぶ楽しさを教えてくださった先生でした。こんなに面白い学問があるのであれば、ぜひ哲学を学びたいと思ったのが、きっかけです。

KM（1年）プロフィールの方を拝見させていただいて、先生はアドラー心理学を学ばれていますが、「アドラー心理学」は簡単に言うと、どのような心理学ですか？

岸見先生　簡単に言うのは難しいですが、三つくらいお話しします。
まず、「原因」ではなく「目的」を考える。例えば、「怒り」を感じる。ハッとした時に、その原因ではなくて、この「怒り」を何のために使うかということを考察するのが、アドラー心理学の基本的な考え方です。要するに、自分の意見を相手に伝えたいわけです。あるいは、「怒り」には「自分の要求を相手に受け入れてほしい」という「目的」があるとわかれば、「怒りに代わる、より良い方法がないか」と考えることで大事な関係のあり方を変えていく、というのがアドラー心理学の一つの特徴的な考え方です。
今、対人関係の話をしましたが、心の中を探るというよりは、「対人関係」を見ます。「怒り」という感情を自分の心の中に立ち上がったものとしてではなくて、「私」と「怒りを感じている相手」との間に起こる感情であるとアドラーは考えているのです。ですから、『嫌われる勇気』を読んでいただければ、「すぐに」とは言いすぎかもしれないですが、他の人との対人関係がかなり変わっていくことを実感されると思います。これが二つ目です。
そして、三つ目が、「所有の心理学」ではなく「使用の心理学」である。どういうことかというと、「何が与えられているか」ではなく、「与えられたものをどう使うか」が大切である、と考えるのがアドラー心理学です。ですから、皆さんいろいろな状況に置かれていますが、「今、自分はこんな人間なんだ」というところに止まらないで、「この自分をどう活かしていくか」ということ

を考えていくのが、アドラー心理学です。難しいですが、簡単に言うとそんなことです。いいでしょうか。

KM（1年） よくわかりました。ありがとうございます。

TU　岸見先生が高校生の時、「こうしておけばよかった」と思うことはありますか？

岸見先生 あります。私が学んだ高校は進学校で、非常に校則が厳しい学校でした。制服着用は当然でしたし、帽子はありましたし、詰襟のボタンも上までしっかり留めないといけない、というような学校でした。

そして、卒業してから何度も思い起こしたのは、どうしてあの時に先生方がそんなふうに校則を厳しく生徒たちに求めたのか。なぜ、こういうことをしなければならないのかということを、もっと先生たちに言わなかったのか、ということです。先生たちに言われたことにただ従うのではなくて、なぜこういうことをする必要があるのか、ということを問いたかった。それが、高校の時にこうしておけばよかったと思うことの一つです。

ある日、質問した同級生がいました。「どうして、僕たちは髪の毛を短くしないといけないのか」と。私が学んでいた学校は仏教系の学校だったので、「君たちはインドのお坊さんと一緒だ」という答えが返ってきました。「お坊さんたちは、髪の毛を丸めているだろう。君たちにはそんなことまでは求めないが、君たちは修行するお坊さんと同じだ。三年間、この学校で勉強するのだったら、髪の毛を短くしたまえ」と言われた時に、納得してしまった自分がすごく恥ずかしい。当時、共学ではなかったのですが、女子生徒がこんな答えを聞いたら、納得できなかったでしょう。「髪の毛が長かったら、勉強に集中できない」、それはありえないですよね。でも、そういう話を聞いた時に、「うん、そういうことか」と思ってしまった。そのように納得したことがすごく恥ずかしいし、もっと聞くべきだったと思う。あの質問に対して声を上げて、「それはどういうことですか」とか、「それはおかしいのではないですか」と言いたかったな、ということです。

TU　ありがとうございました。

KM（2年）『嫌われる勇気』は対話形式で書かれていて、岸見先生は「作家」ではなく「哲学者」ということですが、どのように本を書かれているのかが気になりました。

岸見先生　本を書く前に問いを立てます。例えば、今書いている本は、人と人とのつながりはどうあるべきか、ということがテーマですが、この問いに答えるために寝ても覚めても考えます。考えていると、ふと何か考えが思い浮かびます。これは書き留めないと必ず忘れるので、タブレットなどに記録します。メモがたくさんたまると、それをもとに原稿を書き始めます。問題は、古代ギリシアのソポクレスの言葉を借りると、「思考は風のように速い」のですが、考えていることを論理的に書くためには時間がかかるということです。それでも、思考を可視化することは絶対必要です。書けなかったらわかっていないということですから。書けない日が長く続くと本当に苦しいですが、それでも少しずつ考えが形になってくるのは楽しいです。

私が学生の頃は論文を書く時には原稿用紙に万年筆で書くしかありませんでしたが、今はパソコンを使えるので何度も書き直すことができ、清書する必要もなく、考えることに集中できありがたいです。キーボードも速く打てますが、音声入力をすることもよくあります。

KM（2年） ありがとうございます。

では、次の質問です。アドラー心理学以外で、良いと思うものや、心理学的なものはありますか？

岸見先生　エーリッヒ・フロムのものが良いですね。時代的にはアドラーより後の人で、一九〇〇年生まれのアドラーの影響を受けている心理学者であると理解しています。そのエーリッヒ・フロムが書いている『愛するということ』という著書が面白いです。高校生の皆さんは、恋愛に関心がある方も多いと思いますが、非常に衝撃的な始まりです。つまり、我々は相手がいないから恋愛ができない、できていないと思っているが、実はそうではなくて、愛し方を知らない。愛し方には技術がいる、というところから始まります。また、ハウツー本ではないので簡単に読めませんが、恋愛について考える時に、非常に参考になると思いますので、アドラー心理学以外で、ということでしたら、エーリッヒ・フロムの『愛するということ』をお薦めします。

KM（2年） ありがとうございました。

IN　岸見先生のプロフィールを見ると、長年深くアドラー心理学に関わってきたとあり、僕も簡単にアドラー心理学について調べてみました。アドラー心理学の考え方の一つ、「人は目的をもって行動している」ということを、先ほども答えてくださいましたが、先生が長年アドラー心理学に携わってきた上で、哲学を学んできた「目的」みたいなものを教えてください。

岸見先生　先ほど話したことにも関係しますが、「目的」ということを、普段我々はあまり意識して考えません。ある人が行動している時に、その行動の目的は他の人にはよくわかる。大きな声を出して生徒を叱る先生がいれば、その先生がなぜ怒りに駆られて大きな声を出しているのかということが生徒たちにはわかる。それにもかかわらず先生自身はわかっていない、ということがよくあります。自分自身について、いったい「自分が今、何を目的にして

いるか」ということを「意識化」するトレーニングをする。そうすることで、対人関係の在り方はずいぶん変わってくる。そういう意味でアドラー心理学は「目的」ということについて、はっきりと考えている。

また、アドラーだけでなく、古代ギリシア以来、哲学者たちが論じていることですが、我々の人生にも「目的」がある、と考えています。その「目的」は端的に言うと、「幸福である」ということです。皆さんはそういったことを、改まって考えたことはないかもしれませんが、結局のところ我々は「幸せになりたい」というように考えるのが、古代ギリシア以来の考え方です。「幸せになりたくない人」はいない。ただし、その「幸せになる」ための手段の選択を誤っている、ということはあります。

ですから、皆さんがどういった人生を送りたいと思っているかはわかりませんが、例えば「人生で成功すればいい」と思っている方が、「有名な大学に進学する」ということを目指していられるかもしれません。しかし、果たして進学することが自分の幸福につながるのかどうか。「幸福」という目的を達成するために有用なのか、ということを立ち止まって考えなければいけない。

アドラーは「あなたのしていることは最終的に自分の幸福につながるのかどうか」ということを我々に突きつけます。「そうなのだろうか」ということを徹底して考える。「心理学」という名前がついていますが、このように考えるアドラーの考え方は「哲学」だと私は理解しております。

IN ありがとうございました。

WY 岸見先生が「哲学者」だと聞いて、伺いたい質問があります。先生は、人の誕生は親のエゴだと感じますか？

岸見先生 感じません。いろいろな親がおられますが、多くの親はエゴではありません。たまたま子どもが生まれたとか、そんなつもりはなかったけれど、子どもができたとか。これもエゴではありません。あるいは、子どもに自分の人生の夢を託そうと思って、こんな子どもに育ってほしいとかありますが、これは「親の愛」だと思いますね。

ただ、実際どうかわからないですね。先ほどから「原因」と「目的」の話をしているように、少し言いすぎかもしれませんが、きっかけはどうあってもいいのです。仮に親がエゴで子どもを産んだとしますね。しかし、今の自分を受け入れるところからしか始めることができないのです。

皆さん、憲法の勉強をされたと思います。日本の憲法はアメリカから押し付けられた、だからダメだ、という人がいます。でも、きっかけはどうであれ、できあがった憲法は非常に良いものなのです。

だから、皆さんもそうだと思うのです。どんな環境で、どんな親から、どんな思いで生まれた自分であっても、この私が、この世に生命を受けた以上は、この私を活かしていく。先ほど「使用の心理学」という言葉で説明したことですが、この私をどのように活かしていくのかということを考えて生きてほしいと考えています。

WY 次の質問なのですが、先生は「死」というものをどのように受け止めていらっしゃいますか？

岸見先生 「死」がどういうものであるか、ということは誰もわかりません。死んでこの世に戻ってきた人は、誰もいないからです。

一度死んで、生まれ変わってきたという人がいます。でも、あれは、「臨死」、死に近づいただけです。ですから、死んだらどうなるか、ということを知らない。しかし、知らないからといって探求しないわけにいかない。

私が小学校の二年か三年生ぐらいだった時に、「死ぬ」ということに囚われて、それは非常に「怖い」気がしました。普段思っていることが、すべて無になってしまうのならば、生きていることにそもそも意味があるのだろうか、と考えた時に、小学生だった私は食事ができなくなった。しかし、周りの大人は、死ぬことを知らないかのようにへらへら笑って生きているように見え、それが許せなかった。

これが、「死」とは何かということを考え始めたきっかけになりました。それ以来、「死」については、ずっと考えています。ただ、端的に言えば、答えはまだ見つかっていません。古来、哲学者たちは「死とは何か」という問いを探求してきました。が、おそらく、誰も答えは出せていない。出せていないですが、二つのことが言えます。

一つは、知らないことを恐れる必要はない。知らないことであることを、怖いことであると決めつけるのはおかしい。二つ目は、「死」がどういうものであれ、今の我々が生きる態度を変えてはいけないと思う。たとえ無に帰して何も感じられなくなるとしても、自暴自棄に生きていい理由にはならないでしょう。「死」が何であるかということにかかわらず、誠心誠意、生きていきたい。そのように考えています。

二点と言いましたが、敢えて三点目を加えるならば、「死」は「別れ」であるということ。皆さんは若いので、まだそういう経験をしている方は少ないかもしれませんが、親とやがて死別しないといけない日が来ます。その時に、「死」がどういうものであるかにかかわらず、「別れ」である以上、非常に悲しいものであることには間違いない。その日のために、何ができるかということを考えておかないといけない。何ができるのか、ということについて端的に言えば、一つあります。それは、先のことを考えるのではなくて、今この瞬間のことを大事にする、ということです。朝、出かける時に、親と喧嘩別れしてはいけないということです。それが最後になるかも知れないから。何が起こるかわからない。そのように「死」が必ず我々に訪れる、という現実を考えた時に、果たしてその人と今、

喧嘩をしていていいのかということを、立ち止まって考えてください。私が「死」について考えているのは、そんなことです。

WY　大変興味深い話を、ありがとうございました。

ST　ネットに、趣味が「写真撮影」だと書かれていたのですが、どういったものを撮影していらっしゃいますか？

岸見先生　鳥、花、蝶々。自然の写真が好きです。

今住んでいるところも割合、自然が残っているところですが、前に住んでいたところは本当に田舎で…。写真撮影に、非常に恵まれたところでした。ですから、季節の変化に応じていろいろな鳥がやってきたり、花が咲いたりします。そういう自然にあるものを撮影してきました。最近は、少し撮影するものが変わってきまして、実は二歳と五歳の孫がいます。この孫たちの写真を、一生懸命撮っています。人物写真も得意なのですが、ＳＮＳなどにアップするわけにはいかないので載せていません。

ST　写真を撮影することは、「癒し」を目的にしているのですか？　どういったことを目的として写真を撮影していますか？

岸見先生　この人生は、過ぎていくものです。同じものとしてとどまるものは何一つない。だから、何らかの形で、記憶にとどめておきたいというのが、一番の思いです。自分の孫の話をしましたが、皆さんも日々成長しています。それは非常に嬉しいことですが、ある日あるところでこんな表情していたということを、なんらかの形で、記録に残したい。それはもちろん、例えばエッセイにまとめるとか、文章にしてまとめることでもできます。写真は非常に鮮やかに、過去の記憶を蘇らせます。そういう意味で、あまり「癒し」を目的に写真を撮っていると考えたことはありませんが、「記録する」ということでは、写真は非常に意味のあることだと考えています。

ST　ありがとうございます。もう一つ質問なのですが、岸見先生の著書で「ほめるということは、人を下に見ている」という言葉を読みました。このような見方や考え方というのは、どういったところから来ているんでしょうか？　哲学を学んでいくと、そういったことが見つかっていくのですか？

岸見先生　きっかけの話をしますと、高校生の時に、三年間柔道を学んでいました。体育の授業の時間の他に、週一回柔道の時間がありました。この柔道の先生は、八段でした。一方、私は背が低く、並ばされるといつも一番前に立たされました。

一番小さいので、先生が新しい技を教える時に、必ず私を前に引っ張り出して、その技を皆に教えるために、私に技をかけるのです。その時に、あらかじめ打ち合わせをしました。例えば、「大外刈りという技をかけるから、君はこのようにして、返し技をしなさい」というように。それを他の生徒は知らないですが、私は知っているのです。先生が大外刈りをかけると、私は返し技をして、その先生は大きな先生だったのですが、倒れられるのです。その時に、「すごい」というような言い方をされたのです。が、私は技を決めることが嬉しいというよりも、馬鹿にされたように感じました。本当に、先生に返し技をかけて、倒れられたならいいですけれど、明らかにやらせだからです。しかも、少しもうまく技をかけられたわけでもないのに、「すごい」とか「よかった」というようなことを言われた時に、自分が対等の人間として見られていない思いが強かったです。それが、「ほめる」ということが人を下に見ているということになっている、と気づいた大きなきっかけの一つです。

その後、アドラー心理学を学ぶと、「人間は対等である」ということが書いてある。その時、なぜあの時に違和感を持ったのかというと、「自分が対等に見られていなかった」からだということに気がつきました。逆に、最初の方の質問で少し触れましたが、倫理社会の先生は対等に見てくださいました。まるで高校生であるということを全く知らないかのように。例えば教科書に太い文字で重要な言葉が出てきますね。それを、英語とドイツ語とフランス語とギリシア語とラテン語で、黒板に書かれるのです。それを見て、対等に見られていると思いました。

ST　ありがとうございました。

MM　岸見先生が哲学や心理学の勉強を始めてから、一度も変わっていない考えはありますか？

岸見先生　「この世界には、絶対的な真理がある」という考えは、基本的に変わっていません。

今の人だけではありませんが、相対主義の人が多いですね。相対主義というのは、真理というものは唯一絶対のものがあるのではなく、人によって考え方や感じ方が違うのだ、という考え方です。

ただ、我々は絶対的な真理を知らないだけであって、絶対的な真理というものがあるのだ、という考え方は昔から変わっていません。学び方が足りないので真理に到達することがなかなかできないけれども、「絶対の真理がない」と考えるのと、「絶対の真理はある、探求していかなければならない」と考えるのでは、大きな違いがあると考えています。それが、哲学を研究し始めた頃から一度も変わっていない考え方です。

MM　とても興味深かったです。ありがとうございます。

SY　これが最後の質問です。高校生に「これは伝えたい」ということがあり

ましたら教えてください。

岸見先生　これは高校生によく話をすることなのですが、「自分のことしか考えないエリートは有害以外の何者でもない」ということです。皆さんがどうなのかはわかりませんが、自分のことしか考えない人は多いです。有名な大学を卒業しているにもかかわらず、自分にしか関心がない。そういう人たちが私利私欲に走ってしまう。そういう人たちが政治家になったりしてはいけないと思います。

ですから、皆さんが、能力があって勉強ができるのであれば、その能力を他者に貢献するためにぜひ使ってほしいのです。自分のためだけに勉強する人は、苦しくなったらやめてしまいます。でも、我々は決して自分のためだけに勉強しているわけではありません。勉強をすることで社会に貢献してほしい。私は本を書いていますが、簡単に本を書けません。本当に毎日毎日つらい日々を過ごします。ただ、自分のためだけに書いているのではないと思っているから乗り越えることができる。だから、受験勉強のためだけに勉強をするのではなくて、勉強することは周りの人に貢献するためであると強く意識してほしいです。

SY　ありがとうございます。

司会　三人ほどまだ質問があるそうなので、いいでしょうか。まずは、平田君。

HS　アドラー心理学を学ぼうとした経緯は何ですか？

岸見先生　子育てです。子どもが二人います。子育ては大変です。親の言うことを「はいはい」と聞くような子どもであれば、親は苦労はしない。皆さんどうでしたか？　いつも「はいはい」と親に従っていたわけではないはずです。そういう子どもと関わっていくことは、非常に大変なことです。子育てのことについて私は全然知らなかった自分が親から受けた子育ての仕方を、見よう見まねで子どもに実践しようとしていた。当然、行き詰まるわけです。そういう時に、アドラーの心理学に出会いました。

アドラー心理学は、対人関係を扱う心理学なので、子どもとの関係をどのようにすればいいのかということを、かなり具体的に教えてくれます。そのアドラーの心理学を知ったことで、子どもとの関係がかなり良くなりました。一晩で解決するようなものではない、でも、「子どもは叱らなければいけない」とか「ほめて育てる」とか、世間の常識的な考え方しか知らなかったのに、「大人と子どもは対等である」、「叱らない」、「ほめない」ということを教えるアドラー心理学に、衝撃を受けました。それが、アドラー心理学に出会い、その後も学び続けているきっかけです。

HS　ありがとうございました。

OT　先生は「なにかしら、日々進化している」とおっしゃっていましたが、哲学では時代によって「進化」というものがあるのかな、と思ったのですが…。

岸見先生　アドラー自身は、「人生は進化である」という言い方をします。この場合の「人生」というのは「歴史」と考えていいと思いますが、これは実際、そうです。劣った状態がより優れた状態に「進化」していくとアドラーは考えています。ただ、私自身は「人生」も「歴史」も、「進化」ととらえなくていいと考えています。もっといえば、「退化」しているかもしれません。しかし、少なくとも変化はしています。

同じところに止まるわけではない。同じ状態がずっと続くわけではないし、必ず変化をしているけれども、それが「進化」なのか「退化」なのかは、必ずしも自明ではない。我々は、これまでの「歴史」を振り返った時に、「進化」という観点で見ない方がいいと思います。それから、「人生」についても、「退化」しているかもしれない。皆さんは若いので、いろんなことができると思っているでしょう。こういう状態がずっと続くでしょう。でも、若い人でも、病気で倒れ、身体を自由に動かせなくなるということはありえます。皆さんのご両親も今はお若いでしょうけれども、やがて歳を重ね、病気にもなられ、今は自分でされているでしょうが、やがて介護が必要になるかもしれない。

では、人は皆、「退化」していくのかというと、そうでもない。その時々に、唯一はっきりしていることがあって、それはどんな人生の段階にあっても我々が生きている、ということです。だから、そこに注目しよう、注目したい、というのが私の考え方です。どんなふうに生きているのであれ、それに「進化」とか「退化」とかいう価値判断をしないということです。

どういう状況に置かれた、どういう人であっても、自分が生きているということに価値があると考えてほしい。そのように考えた時に、私自身は「人生は進化である」と考えない方がいいと思います。前の方を歩いている人もいれば、後ろの方を歩いている人もいる。こう考えても、後ろの方を歩いているのは駄目だというようなイメージを与えてしまうことになりますが、いろいろな生き方があってもいいのです。その時々で、違う生き方も価値がある、と考える。そして、人類の歴史についても同じように考えています。

哲学についても、「進化」というものはないと私は考えています。自然科学であれば日進月歩であり、新しい知見が次々に明らかにされていきますが、哲学については「最前線」というようなものを考える必要はありません。私の専門は紀元前五世紀のプラトン哲学ですが、プラトンは昔の人だから価値はないとは思いません。

OT　ありがとうございました。

ＮＫ　僕は『絶望から希望へ ～悩める若者と哲学者の“幸福”をめぐる対話』という本を読みました。この本の中には「人生皆、誰もが絶望したことがある」と書いてあったのですが、僕自身は「絶望」という感覚がよくわからなかったので、「絶望」とは何なのかを教えていただきたいです。

岸見先生　冬の寒さを経験したことがない人に、夏の暑い最中に冬の寒さはこのようなものだと教えることは非常に困難であるのと同様に、絶望したことがない人に、絶望を説明するのは非常に難しい。

「絶望」という言葉の響きは非常に重いですが、自分がしたいと思っていたことが、思いがけずできなくなるということが、人生ではあります。

昔の話ですが、東京大学の入試が中止になった年があります。学生運動が盛んだった時のことです。東京大学を目指して、小学生ぐらいの時から受験勉強していたのに、今年は受験ができない、となった時に絶望した人はいたでしょう。それは、自分が願っていた人生を歩めなくなったということに対する不安であったり、そんなはずではなかったという意外な思いをした、そういったことも、「絶望」に含めて考えていいと思います。

そういう経験はないですか？ あるいは、誰か好きな人に告白してみたところ、あなたを異性として意識したことがなかったというような、思いがけない痛烈な言葉で返されてしまうというような時に、「絶望」という言葉は少し重すぎるかもしれませんが、自分の思っていた、思い描いていたような人生に、行く手を遮ることが起きてしまった。その時に、「絶望」するということです。こういう感覚でわかるでしょうか？

ＮＫ　なんとなくわかりました。

岸見先生　そういう経験が、今まであまりないのですね？

ＮＫ　僕はもう部活はやめてしまったのですが、二年生の頃は部活をやっていて、その時は陸上部だったのですが、タイムがどうしても伸びなかったりすることがありました。怪我とかもありまして、自分のタイムが思うように行かなかった時期が、一年ぐらい続いたのです。その時がかなりきつかったので、それと似たような感覚なのかなと思ったのですが、どうでしょう？

岸見先生　それに似ていると思いますね。ただ、「絶望に止まらなかった」ということが、大事なことですね。思うような記録が出せないということがあったからといって、生きる気力を失ってしまうような感覚を持たれなかったのですね。

ＮＫ　はい。

岸見先生　それに代わることを見つけられたかもしれないし、例えば、陸上ではなくて別のことにもっと力を入れてみようと考えられる人がいたら、それが成瀬高校ホームページで見たのですが、Think Positive、ポジティブに考えよ、ということの意味です。

我々がその「絶望」をすることで、何を「目的」にしているのか。「絶望」の「目的」は何か。今日の話のテーマの一つなのですが、「絶望することで、人生を前向きに生きないでおこう」、これが絶望することの「目的」なのです。ですから、同じ出来事を経験しても、皆が「絶望」するわけではない。これが非常に私は大事なポイントだと思うのです。

だから、そんなふうに自分の夢だったことが実現できなかった時、それで「絶望」してうちひしがれ、落ち込んでしまって前を向いて生きられない人がいる一方で、皆がそうではない。「おそらく絶望した経験がないのではないか」という言い方をしてしまいましたが、絶望した経験があっても、その経験を「まぁいいか」という言葉が適当かはわかりませんが、その経験をバネに、また違う新しい人生を生きる勇気を持たれたということだと思いました。今のお話を聞いてね。

ＮＫ　はい。わかりました。ありがとうございました。

司会　たくさん、質問に答えていただきありがとうございました。質問は以上になります。先生から何かございますか？

岸見先生　振り返ると、高校生活の三年間は重要だったと思います。歳を重ねると、あの頃と違って、今はまだ七月なのに年末のことを考えている。あっという間に一年という時間が過ぎ去るという感覚を大人は持ってしまう。でも、皆さんはそうではないのではありませんか？　私自身、振り返った時、たったの三年だったことに驚きます。長く生きてきましたが、その三年間の密度は他の人生のどの時期よりも濃かったと思います。そこで、いろいろな先生にも出会いました。大切な友人にも出会えました。「この三年間はもはや取り返しがつかない」と言うと否定的ですね。でも、一度失ったら、元には戻れません。そういう意味では、この三年間を充実したものにしてほしい。ですから、この三年間を人生の一つのステップにしないでほしい。大学進学するための通過点として見ないで欲しい。

この三年間でしか学べないことがたくさんあります。もちろん、受験勉強は大事ですけれども、受験勉強をするためにだけ、この三年間を過ごす、というのではあまりにもったいない。この三年間に、受験勉強もしてほしいですし、もしかしたら、（成瀬高校の）先生方にとってはあまり言ってほしくないと思われるかもしれませんが、本をたくさん読んでください。映画もドラマも見てください。そういうことを通じて、「人生とは何か」ということを学べると思います。今日は哲学の話から

始めましたが、本当に人生にはまだまだ、知らないことがたくさんあります。そういうことを、溢れるばかりのエネルギーを持って知的な関心を持って、学んでください。そういうふうに考えて、あっという間に三年間過ぎるというのであれば、もちろん、それはいいことだと思いますし、今日出来ることを精一杯してください。

よく本の中で私が書いている言葉ですが、「今日という日を、今日という日のためだけに使う」。そんなことはできないと言われるかもしれない。でも、今日できることはあります。先のことを考えたら、絶望したり不安になることは多々ある。今日は一年生から三年生の方がおられますが、受験を目前にしたら、ただ不安しかないと思っている人も多いかもしれない。でも、不安を感じても、何も意味がありません。不安に感じるのは、勉強するのをやめようという決心を後押しするためです。不安を感じている暇があれば、今日できることをする。結果は誰にもわかりません。今日できる最善のことを少しずつして行けば、振り返れば、次のところまで来たな、と思えますし、その日々の努力が報われる。きっと報われると思う。

そういう生きるヒントになることを、今日の話からつかんで、答えは出ないかもしれないですが、「こんなふうに考えることができるかもしれない」ということを、少しでも学んでもらえたとしたら、嬉しいです。ありがとうございました。

司会　ありがとうございます。不安を感じる必要がないというのは、私は今、三年なので、受験するんですけれど。受験するわけではない二年生、一年生にも刺さる言葉なのではないかなと、思いました。あと、私たちに質問とか…あれば。

岸見先生　**今、生きていてよかったと思う瞬間はありますか？**

WY　私が生きていてよかった、と思える瞬間は、私は空想が好きなので、布団にくるまって、少し自分の匂いを嗅いで、落ち着いた時に、ちょっと空想の世界に入って、空想の世界の友達と話して、そのまま空想の世界に入ったまま眠りにつく瞬間、そんな瞬間が好きです。

岸見先生　いいですね。今の話を聞いて思ったのですが、幸福の瞬間は、そんなふうに訪れますね。何か大きな課題を達成した時に感じるようなものではなくてね、日常生活の中でふいに訪れる。ちょっとしたその日の楽しみを楽しみとして感じられるような、そういうことが、これからの人生で大事になってくると思います。これからの人生で、本当に、生きるのがつらくなることが起こります。自分が願っていた仕事に就けたとしても、毎日「すごく幸せ」とふうに感じられるかというと、そうではない。もし、そういうことがあった時に、先ほどのような楽しみがあるのは大事です。もしも、そんな瞬間を持てないような過酷な状況に置かれ、仕事をしているのに少しも幸福でないと感じられるようであれば、それは仕事の仕方に改善の余地があると考えた方がいい。我々は決して、仕事をするために生きるわけではないのです。これは皆さん、まだそんな自覚がないかもしれませんが、日常にふいに訪れる瞬間に、ちょっとした喜びを日々の生活の中で見出せるかどうかが、自分が今、していることが意味のあることかどうかを判断する大きな手がかりになります。そういうことを基準に、今の人生を…「評価」というのはおかしいですね、この人生でいいのかということを考える一つの基準として考えてみるといいと思います。

WY　ありがとうございます。

司会　そろそろ時間になりました。終わりの挨拶をお願いします。

終わりの挨拶（ＳＹ）

改めて、本日は貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。本日のインタビューで、これからの人生について考えるとても良い機会になったと思いました。僕が今回、一番印象に思ったことは、「この高校三年間を人生の踏み台にしてほしくない」ということです。そんなふうに考えたことがなかったので、とても印象に残りました。本当にありがとうございました。

岸見先生　ありがとうございました。

生徒一同　ありがとうございました。

岸見一郎先生プロフィール

哲学者。一九五六年京都生まれ。高校生の頃から哲学を志す。京都大学大学院文学研究科博士課程満期退学。専門の哲学（西洋古代哲学、特にプラトン哲学）と並行して、一九八九年からアドラー心理学を研究。

日程　令和５年７月14日（金）
午後１時30分～２時20分

場所　図書室

方法　オンライン（Zoom）

参加者　読書班を中心とする図書委員10名＋参加希望生徒２名

３年　ＳＴ　ＮＫ　ＳＹ
ＯＴ（オンライン）
ＭＭ（司会）
２年　ＩＮ　ＨＳ　ＫＭ
ＮＨ　ＷＹ
１年　ＫＭ　ＴＵ
（計12名）

参観者　佐藤雅美・青木肇（進路指導部　図書館担当教諭）
Ｄ社Ｉ氏（オンライン）

図書委員会顧問　池田祥子（司書）
鈴木薫（司書教諭）

デジタルサポーター　二葉友祐

〈インタビューの様子〉

た本を読んだり、お話を聞いて、難しいとの印象に変化は無かったけれど、哲学って面白い学問だと感じました。

今回のお話で特に印象に残ったことはアドラー心理学のお話と、先生が「自分のことしか考えていないエリートは、有害である」とおっしゃっていたことです。

アドラー心理学のお話が印象に残った理由は、「何を与えられたか」ではなく、「与えられたものをどう活かすか」という言葉に感銘を受けたからです。天から与えられた私という生命をどう活かすかと、常日頃考え続ければ、違う世界の見方ができるのではないかなと感じました。

そして、二つ目の「自分のことしか考えていないエリートは有害である」という先生の言葉は、すとんと私の胸の中に落ちてきて、なじんでいきました。加えて、お話されていた「自分のために勉強をしているといつか心が折れてしまうから、社会に貢献するために勉強をする」という言葉にもハッとさせられました。自分のためだったら限界があることも、人のためだと思って乗り越える、すごくすてきな考えだと思いました。

このほかにも、お話や本の中で気づかされることが多くありました。きっとこの作家訪問が無ければ気がつくことができない発見だったし、哲学に興味を持つこともできなかったと思うと、本当に貴重な時間でした。今回、作家訪問を受けていただいた岸見一郎先生、取り次いでくださった出版社の方々、本当に有難う御座いました。

（1年　KM）

◆今回は、誰もが一度は耳にしたことがあるほどに有名な心理学本『嫌われる勇気』の作者である岸見一郎先生に、「哲学者訪問」をさせていただきました。

私は岸見先生に、「高校時代にこうしておけばよかったと思ったことはありますか」とお聞きしました。岸見先生が哲学を志されたのは、高校の頃と知って、先生の高校時代のお話を聞いてみたいと思ったからです。岸見先生から頂いた答えは「学校の先生の返答を疑わなかったこと」でした。岸見先生は校則が厳しい高校に在籍しており、その校則についての疑問を学校の先生に投げかけたところ、簡単に言えば「そういう校風だから」と返されたそうです。岸見先生は、その答えに対して、疑うことなく納得してしまい、聞き返さなかったこと、追求しなかったことを後悔している、という風に話されていました。私はそのお話を聞いて、目が覚めたような気持ちになりました。私たち生徒は、どこか「学校の先生の言うことが正解」だと思い込んでしまう面があります。しかし、実際はそうでないはずだと、大きな声では言えなくても、心の中で思っていました。学校の先生だって一人の人間であり、間違うこともあります。先生からものを教わる「学校」という環境の中で、私たちはいつの間にか答えを疑うことをやめてしまっていたのではないか、先生の答えを疑うことも一つの選択肢なのではないか、と思うことができました。

岸見先生のお話は、この他にも私たち高校生が普段目を向けない世界について知ることができた本当に貴重な経験でした。これから先、不安なことがあっても、目の前の人が常に正しいとは限らない、答えを疑う心を忘れずにいたいと思いました。岸見先生、今日は本当にありがとうございました。

（1年　TU）

作家訪問の記録

◇第1回　二〇一六年　山田悠介氏
◇第2回　二〇一六年　東川篤哉氏
◇第3回　二〇一七年　似鳥鶏氏
◇第4回　二〇一八年　井上真偽氏
◇第5回　二〇一八年　赤川次郎氏
◇第6回　二〇一九年　伊坂幸太郎氏
◇第7回　二〇二〇年　香月美夜氏
◇第8回　二〇二一年　知念実希人氏
◇第9回　二〇二二年　はやみねかおる氏
◇第10回　二〇二三年　岸見一郎氏
※第7～10回はオンラインで実施

今回をもって、「作家訪問」は終了いたします。インタビューの申し込みを快諾してくださった先生方、取り次いでくださった出版社の方々、お世話になった皆様方に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

（司書　池田祥子）

【感想】

◆今回、「作家訪問」させていただいた方は、哲学者の岸見一郎先生でした。最初、プロフィールだけを見たときは、「哲学者」って何を学んでいるのかよく分からないし、本も難しそうだなと思い、正直お話についていけるか心配でした。しかし、実際に先生の書かれ

第26回 古本市について

今年の文化祭は、コロナ後、初めての一般公開ということもあって、大盛況でした。図書委員会恒例となった古本市も26回目を数え、毎回楽しみにご来場くださるお客様も多いと聞いています。今年は２階の３年３組教室が会場でした。

この「26回目」というのは、売上金を寄付している福祉団体からいただいた礼状に記載された回数です。一時期、別の福祉団体に寄付していた記録も残っていることから、実際の開催回数はもう少し多いと思われます。

ともあれ、今年もおかげさまで無事に終了し、２日間の売上が一万四五〇円であったことと、全額を日本点字図書館に寄付することをご報告します。

古本を提供していただいた方、ご来場いただいた方、様々な形でご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。

古本市の開催にあたっては、図書委員全員で１年生から３年生の混成３チームを編成しました。

そのうち、「古本チーム」は７月から校内で古本の募集、回収と仕分け等を行い、準備期間からは会場設営、当日の進行管理と会場当番を担当しました。

ほかに、会場装飾を担当する「装飾チーム」、巨大絵画「キッズゲルニカ」を制作する「ゲルニカチーム」があり、各チームとも上手くいかなかったことや、やり残したこと等があったようですが、見つかった課題は次回に活かしたいと考えています。

（池田）

古本市を運営してみて

１年生で初めての古本市を運営してみて、とても多くのお客さんが来てくれて、本屋で働いているような感覚を味わうことができてとても楽しかったです。また、先輩とも古本市を通して仲良くなれたので、とてもうれしかったです。

（１年　ＷＹ）

キッズゲルニカ

昨年好評だった「キッズゲルニカ」を再び制作することになり、「ゲルニカチーム」は、ＣＳ、ＫＨ、ＮＲを中心とする少数精鋭で、夏休みの委員会活動日を利用して３日間で仕上げました。

〈制作の様子〉

「キッズゲルニカ」とは、ピカソが、無差別爆撃を受けた町、ゲルニカの状況を描いて戦争の悲惨さを訴えた「ゲルニカ」にならい、縦三・五×横七・八メートルの大きなキャンバスに、子どもたちが平和のメッセージを込めて描く国際的なアートプロジェクトです。

図書委員会は非公式参加ではありますが、模造紙を貼り合わせ、教室の黒板サイズに合わせて若干縮小した巨大キャンバスを作り、プロジェクトの趣旨に沿った絵を描いて会場に飾りました。

【作品名】「澄清（ちょうせい）」

【作品解説】この作品は、「自由・コロナからの解放」をテーマに描きました。広い空へ飛び立っていく白い鳥を描くことで、今まで制限されてきたことやものから解放され、好きなところへ飛んでいける、自由になることを表現しました。これから明ける空が、世界が、明るくあることを願っています。

（ＣＳ）

――――――――――――――――――――――――

（澄清：空が曇りなく晴れ渡っていること、世の中が清らかで平穏に納まっていること）

図書館の「リクエスト」に関するアンケート

今回、図書委員会・貸出班３年生は１学期の活動として、「リクエスト」制度を使ったことがあるか、使うならどのジャンルがいいか、図書館に行く理由と行かない理由について、アンケートをとりました。ご協力いただいたみなさん、ありがとうございました。

◆アンケートの概要

◇対象：２年生全７クラス（275名）＋１年生全７クラス（278名）=553名

◇日程：７月６日（木）・７日（金）

◇方法：昼休みまたはショート・ホームルームに各クラス図書委員が実施目的・回答方法等を説明し、Forms（フォームズ）で回答してもらい、集計した。

◇回答数 189（回答率　34％）

Q１　リクエストをしたことがあるか？

ある:13名（6.9%）

ない：176名（93.1%）

Q２　リクエストしたい本のジャンル

（複数選択可）

注：０類（総記）や、雑誌は除いた。

１類　心理、哲学:31

２類　歴史:18

３類　社会問題:9

４類　生物、自然:18

５類　コンピュータ、技術:11

６類　農水工産業:7

７類　芸術、スポーツ、音楽:104

８類　語学:12

９類　詩集、小説:273

※９類の内訳

詩集:2

小説（ライトノベル）:65

小説（ミステリー）:80

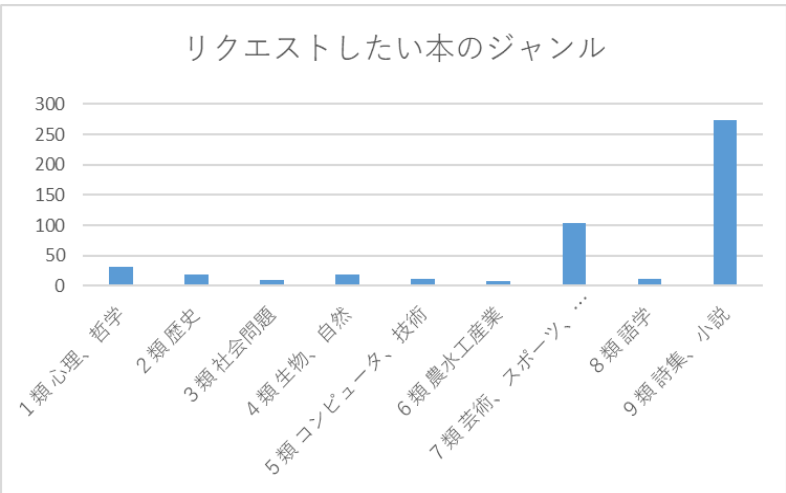
小説（SF）:24

小説（恋愛）:71

小説（仕事）:12

小説（その他）:19

計 483名



Q３　図書館に行く理由（記述式回答）

↓「まとめ」参照

【まとめ】

リクエストを利用したことがある人は全体の6.9%しかいませんでした。どのジャンルをリクエストしたいかでは「小説」などの「文学」である「９類」が全体の半分を占めており、次点では「芸術」などの「７類」、そして「心理学」や「哲学」などの「１類」の順で多くなる結果となりました。

ここでもっと詳しく分析するため、「木馬」バックナンバーを参照し、「木馬」31号（昭和61年３月発行）、「木馬」43号（平成２年３月発行」掲載の調査・統計値（以後、「昭和」「平成」と略します）と比較してみることにしました。ただし、今回の調査データ（「令和」とします）は二〇二三年４月から７月の１・２年生の貸出冊数、「昭和」は４月から12月25日までの１・２・３年生の貸出冊数、「平成」は４月から12月２日までの１・２年生の貸出冊数です。「令和」「平成」「昭和」では、生徒の人数も期間も異なり、正確な比較はできないため、あくまで参考としてですが、「３類」の「社会科学」、「５類」の「技術分野」、「８類」の「言語」が年々減少しており、どの年でも「９類」の「文学」が一番多い結果となりました。

この「９類、文学」について、先生方の間で「成高生はミステリーが好きなのではないか」と言われていたため、**Q２「リクエストしたい本」**の質問で「９類」のジャンル分けした結果を見ると、「ミステリー」がトップで次に「恋愛小説」、「ライトノベル」と、実際に「ミステリー」が人気であることが裏付けられる結果となりました。

Q３「図書館に行く理由」として、「本が好きだから」が一番多く、「読みたい本がある」「落ち着くから」などがありましたが、「勉強や資料集めのため」と答える人が次点で多かったです。

逆に、「行かない理由」として、「そもそも苦手であり、読むことがなく、機会がない」と答える人が多かったのですが、一番多かった答えが「時間が無い」ということでした。勉強や部活で時間がないのもありますが、教室から遠いため休み時間では間に合わず、階段の上り下りも面倒に感じてしまい、行かないと答える人が約３分の１を占めていました。

今回の調査で成高生の好きな分野やよく読む分野が分かりました。司書さんによれば、図書館の本はその時代で注目されているものや学んで欲しいものが入荷されるため、生徒のリクエストのみを反映させるのは難しいとのことですが、今回のアンケートで人気だったものが増えると嬉しいですね。

（貸出班班長　３年　ＳＡ）

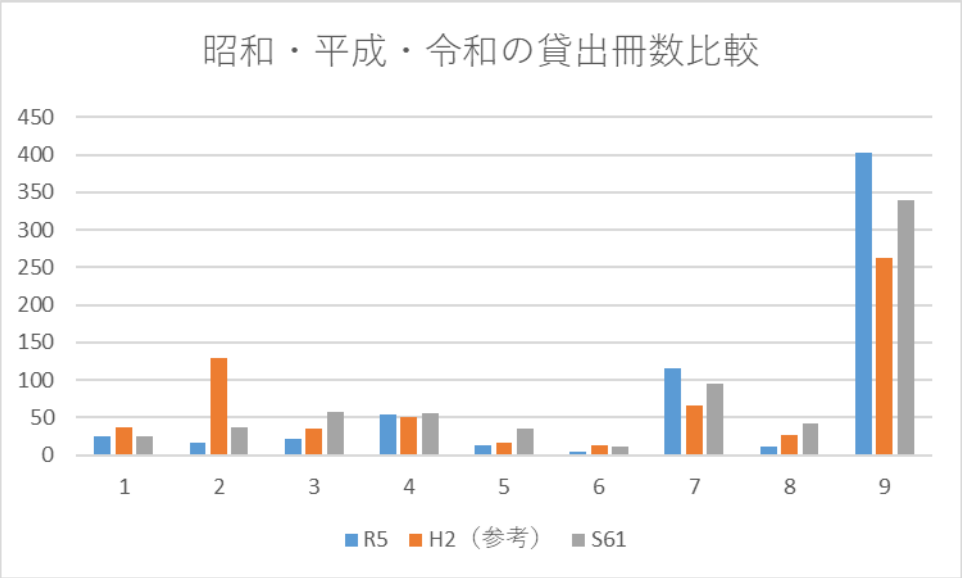
※調査設計指導　鈴木司書教諭

調査分析指導　池田司書

【参考データ】昭和・平成・令和　分類別貸出冊数の比較

	対象	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8墨	9類
2023（令和5）年4～7月	1・2年	25	16	21	55	13	4	115	11	402
1989（平成元）年4月~12月2日	1・2・3年	37	130	36	50	16	14	66	27	263
1986（昭和60）4月~12月25日	1年	4	11	19	23	27	5	12	14	106
	2年	22	27	49	33	8	7	84	28	234
	3年	26	38	58	56	35	12	96	42	340

出典：「木馬」No.31（昭和 61 年 3 月発行）、No.43（平成 2 年 3 月発行）



校内ビブリオバトル開催

9月22日（金）放課後、図書室にて、校内ビブリオバトルが開催されました。図書委員会・イベント班の1、2年生もバトラー（チャンプ本を選ぶ人）として参加しました。ギャラリーは生徒・教職員合わせて20名でした。

出場者を発表順に紹介します。

①ＫＲ さん（1-7）
『人魚の眠る家』　東野圭吾 著
②ＳＮ さん（1-1）
『桜のような僕の恋人』宇山佳佑 著
③ＳＨ さん（1-5）
『アルジャーノンに花束を』
ダニエル・キイス著
④ＫＭ さん（1-2）
『アリス殺し』　小林 泰三 著
※体調不良により欠席
⑤ＹＨ さん（1-4）
『青春ゲシュタルト崩壊』
丸井とまと著
⑥ＫＳ さん（1-6）
『アルジャーノンに花束を』
ダニエル・キイス著
⑦ＹＮ さん（1-3）
『レゾンデートルの祈り』楪一志 著
⑧ＳＭ さん（2-3）
『どちらかが彼女を殺した』
東野圭吾 著

チャンプ本に選ばれた『どちらかが彼女を殺した』を紹介してくれたＳＭさんが、10月に開催予定の「高校生による書評合戦」東京大会に出場する予定です。

図書書委員会からのお知らせ

◆秋の「読書週間」

10月27日～11月9日は、秋の「読書週間」です。図書委員会は、貸出班、読書班を中心に皆さんの読書欲に働きかける楽しい企画を準備中です。

◆クリスマスプレゼント抽選会　予告

年末に図書室で、恒例のクリスマスプレゼント抽選会を行います！何をもらえるかですって？ それは秘密です・・・全員もらえるはずです。

（イベント班）

◆POPコンテスト

私たちは、この秋、POPコンテストに応募します。私たちと一緒に制作してみませんか？　（POP・広報班）

◆合同読書会

今年度も3月頃、小川高校との合同読書会を、本校図書室で行う予定です。

（読書班）

令和5年度　図書委員会

○委員長　前期　MM（3年）
　　後期　NY（2年）

○副委員長　前期　SY（3年）
　　後期　NR（2年）

○書記　前期　CS（3年）
　　KH（3年）

○会計　後期　AT（2年）
　　通年　IN（2年）

「今日の本田くん」No.12

原案・38期　IH　／　絵・2年　HI

＊文化祭活動

文化祭のため、図書委員全員、42名が3チームに分かれて活動しました。

◇古本チーム　24名
　リーダー　YS（3年）

◇ゲルニカチーム　4名＋応援2名
　リーダー　CS（3年）

◇装飾チーム　14名
　リーダー　KH（3年）

＊班活動（クラス順）

今年度は左記の編成で活動中です。

★POP・広報班（活動日＝火曜）

3年　CS（前期班長）
　　KOH　KH
2年　YM（後期班長）
　　AT　NR
　　KOM
1年　SH　TM
　　SS　YY

★貸出班

（活動日＝貸出当番の日、水曜）

3年　SA（前期班長）
　　KY　KT
　　ST　MS
2年　SH（後期班長）
　　KK
1年　KT　AY
　　YA

★イベント班（活動日＝木曜）

3年　YS（前期班長）
　　SY　SK
2年　UM（後期班長）
　　HI　NY
1年　OT　IY
　　WY　KR

★読書班（活動日＝金曜）

3年　ST（前期班長）
　　NK　MM
2年　KM（後期班長）
　　IN　HS
　　YA　NH
1年　KM　IM
　　TU

編集後記

記念すべき第10回の「作家訪問」（オンライン）は岸見一郎先生という素晴らしい哲学者の先生をお迎えして締めくくることができました。また、伝統の「古本市」には今年も沢山の方にご来場いただきました。コロナ後、「貸出班」が復活し、図書館の叢書点検も手伝ってくれました。

文化祭を境に、図書委員会活動は後期に入ります。今後の活動は、ホームページの「図書館だより」に掲載しますので、よろしければご覧ください。皆さまのご協力、温かいご支援に心より感謝申し上げます。　（池）